

対照言語学の理論的基礎づけ ——その確立に寄与した三学説論を通して

和 田 辨

具体的事実に基づいた研究しかないという学問は、われわれの知識の第一段階を成すにすぎない。Einstein のような 20 世紀の科学者が果たしてきた主要な科学的役割は、新事実の発見ではなく、むしろ既知の事実に対する新しい見方の発見にある。- G. Warnock : “ Analysis & Imagination ”, The Revolution in Philosophy, 1956 ; M. Ivić : Trends in Linguistics, 1965.

[CL = 対照言語学, CG = 同文法, CS = 同研究, CA = 同分析, L = 言語学]

前号 (No. 7) 所載の前編では、第 1 部において、Di Pietro : Language Structures in Contrast, 1971 の包蔵する欠落と疑問点が摘出された。つまり、その (a) 節で筆者は、ロマン語学者 Grandgent (1892) に始まる著者所説の「CL 発展史上の注目すべき労作群」に、Whorf の理論的小論考 (1941) は引用されながら、Jespersen (1924) と Bühler (1934, 1965) の理論的大著の欠落を指摘し、(b) 節では、氷炭同様に相容れないとされる生成と分類の方法論的両対立概念を、いとも安易に吻合させた Di Pietro 理論の、モザイク的な粗漏さ (と、B. Spolsky の書評 (1973) も、その点を全く逸した手落ち) を突き、更に (c) 節では、著者の CL が則るべき、従来の (G) TG より一層深く・包括的とされるモデル、つまり $S \rightarrow \begin{bmatrix} M \\ P \end{bmatrix}$ に始まるルールの体系が、その先行モデルと同様に、Oh, wow! ; Hi, bud! ; &c. の諸文を生成不可能なこと、またなぜ感嘆文に否定が不可能なのか、なぜ命令文に過去時制が不可能なのかも、 $M \rightarrow [\text{time, aspect, Q, negation, \&c.}]$ の方式では、解明できないことを、指摘した。そして問題解決の鍵は、言語の本質 (的機能) 論にあり、Di Pietro (1971) が (G) TG と同様に欠く言語本質論を、明白に CL, CG の起点としたのは、皮肉にも Di Pietro が看過した Jespersen (1924) と Bühler (1934, 1965) であったことを述べ、また言語の本質とその普遍性こそ、(史的・比較文法とは対照的に) 人類の全言語を普遍的に比較する CG, CL の成立を保証することを述べ、続く第 II 部で、Jespersen の CG—Notional Comparative Grammar を論じた。

Jespersen の, Ph. of Gr. に体现された Notional Comp. Gr. は、確かに The essence of language is human activity... で始まっている。がそれは、Humboldt 的 Energetik der Sprache の再強調の域を殆ど出ず、明細化されなかった。従って II (a) で示したごとく、かれの CG の基本概念 Notion と統語論との関係論 (—それが文法家の課題とされる) は、言語の本質 (的機能) 論の裏づけ不足による

隔靴搔痒感と不安定な動揺性を、当然帯びてくる。それは、著者自らも unwittingly に容認した証左がある。そこで、そうした事態を救おうとするかのように、次のことが起こる。一面では事物の合理的な分類と観念の論理的な分類に則り、他面では現実の言語の統語範疇に細心の注意を払って設定された Notional な範疇は、II (b) で明示したごとく、現実の言語の統語範疇より一段と高位で一般的な一つの新しい統語範疇として、現実の言語の文法が、それに近づくことによって、より高度の合理性と一般性を獲得し完全性に向う、理念的な統語範疇の役割を与えられてくる。つまり、文法範疇の向うべき目標—理想像が、それに託され、二重写しにされてくる。(そうした思考様式の背後に Spencer 的進化論と言語発達論があったことは、勿論である。) 科学の対象としてではなく、科学自体に理想という価値概念を導入することは、問題であるが、万一言語の理想像を考えると、言語の本質(的機能)論の展開が、先決のはず。にもかかわらずその展開を阻んだ主因は、II (c) で論証したごとく、科学的方法論に対する著者の反省の欠如と古典的な科学方法論の鵜呑みにあった。それは、どの範疇設定の手順にも明らかなごとく、帰納と分類による類概念の確立に終始し、得られた類概念は、それが抽出された個々の事例の本質とされる。が類概念は、本質とは次元を異にする。例えば、著者の CG の支柱—「全人類に普遍的な根底的観念」であるはずの Notional な範疇でさえも、著者の科学観にたつ限り、様々な存在や観念から抽出される高々最大公約数的な類概念にすぎず、現象的次元のデータの多寡と変動に左右され、それと共に浮動せざるをえない。そのように本質とかけ離れた類概念が、現象の説明原理となりえないのは、当然である。類概念はまた、中間的事例を適切に処理できないため、言語を始めどんな研究対象も、結局、割りきることは不可能という諦観を生む。(解決は III (c) 参看。)

III K. Bühler の “Der universelle Vergleich der Menschensprachen”

第 II 部で CL の成立について結論的に問われた枢要な二点、つまり言語の本質論と科学的方法論を巡って、Ph. of Gr. の水準をぬき越えた厳密・周到な構想を、とりわけその本質(的機能)論を中心に打ち出したのは、K. Bühler (1897 - 1963) であった。かれは、Geneva 学派から Prague 学派へと継承された新潮流に棹さしつづき、同僚 H. Gomperz の意味論や、数学に詳しい Cassirer, Husserl などの言語理論を改善すると同時に、自らの専攻 Gestalt 心理学の原理を踏まえて、55 才までの実践豊かな講義と著述を、434 頁の理論的大著 Sprachtheorie, 1934 に結集した。戦後 1965 年にも復刊された本書は、結語をかねた序文の中で、こう主張している。――

『本書においてわれわれが問いかける問題は、言語はどこから来たか、ではなくて、言語は何であるか、ということである。』

『以下の紙面で、われわれは、言語学者の研究室に属する言語を、その構造法則について吟味しようと思う。そして前兆に誤りがなければ、われわれは、比較言語研究の一つの新しい勃興を、つまり人間の諸言語の普遍的な比較(一対照)の局面 Phase des universellen Vergleiches der Menschensprachen を、迎えることになるであろう。それは、既に Humboldt やかれと同時代の人々の念頭に浮んでいたこと

でもあるが、今それは、〔その当時より〕一層高い基盤の上 auf höherer Plattform に実現されなければならない。

全考察のまず第一にあげられることは、これまで知られ、研究されている人間の全言語は、本質的な構造同一性 wesenhafte Strukturgleichheit をもつ、ということである。単数で云い表わされる言語 die Sprache という言葉は、〔この点からいって〕適切な意味をもったものであり、それは証明できるものである。われわれは、言語 die Sprache について、四つの主要命題を立てるのであるが、それらは、全ての国語に妥当するものである。それらは、十分に広範であるばかりでなく、十分に精確でもあり、〔諸国語のもつ〕全ての現実的な差異が〔つまり全ての対照的事実が〕、その中に体系的に記入されることのできる in welchen alle wirklichen Verschiedenheiten systematisch eingezeichnet werden können 一定の枠組を、定着しうるものと、私は考える。それこそ、私が本書に寄せる信念であり、また希望なのである。』— Pp. III—IV. (〔 〕内は、筆者の補足。)

そして著者は、「諸国語の全ての現実的な差異〔/対照的事実〕が体系的に記入されることのできる枠組」—それを定着させる「人類の全言語に普遍的に適用する言語そのものの本質的構造に関する四つの主要命題」—(A)言語の機関モデル、(B)言語の記号性、(C)談話行為と言語作品、談話作用と言語形像、(D)語と文、言語の象徴の場体系を、次々と説いてゆく。その中には、CL, CGの理論と並んで、日本語(の指示詞の ko-, so-, a-, do- 体系など)を含め多くの国語への言及が見られ、CL, CGの実践も織り込まれている。

以上から、Bühler の著書が「言語の本質論を軸とし、広い学際的視野に立ち、高度の科学性を具えた、CL原論/理論CLの書」であることが、容易に推測されよう。いま、上記の四つの主要命題のうち、特に枢要と思われる二つの論旨を取り上げ、その要点を、論評を加えつつ述べておこう。それらは、CL, CGの基軸としての言語の本質論議の中で、不可欠の重要な地位を占めるばかりでなく、言語研究一般の今日の局面にも大きく貢献できるはずである。

- (a) その第一は、公理(A)、つまり Bühler が「言語の機関モデル」 das Organonmodell der Sprache とよんだものである。元来これは、Sprachtheorie 以前の著述—例えば「言語学の公理論」“Die Axiomatik der Sprachwissenschaft,” Kant-Studien 38, 1933 では、その結論部に述べられていたものであるが、本書では、四つの主要命題の冒頭(A)に掲げられている。別言すれば、Bühler にとって「言語の機関モデル」は、言語理論のアルファでもありオメガでもある重要性をもつ。言語の機関モデル論の中で Bühler は、周知の巧みな図式を用いて、言語の本質的な要因と機能を論述した。言語の記号 Z (eichen) が対象と事態 Gegenstände & Sachverhalte にかかわる契機にそって、演(出叙)述 Darstellung の機能が、また送者/話者 Sender とのかかわりの契機にそって、衝動的な表出 Ausdruck の機能が、さらに受者/聴者とかわる契機にそって、訴え Appell の機能が、それぞれ成立する。また Z と話者、Z と聴者は、それぞれ実線で結ばれ、表出と訴えの二つの場合には、発話時の Z の内容が、話者と聴者および二者が相対峙する現(前の)場に即して、それか

ら離れえないことを示す。これに対し、Zと対象・事態は点線で結ばれ、演述の機能の時には、Zの内容が、現(前の)場を離れた象徴の場 *das Symbolfeld* で機能しうることを示す。従って演述が客観的に言及する事象は、当然、過去・未来さらに想像上のものでもありうる。それゆえ、実線と点線は、言語の本質的機能間の重要な相違点を示すと同時に、その相違が、場の分かれの経緯と緊密・不離の関係にあることを示す。

上記のうち、場の論議は次節(b)に譲るとして、Bühler の本質的な三機能論に対しては、その改善と拡充を目ざした数提案が提出されてきた。G. Stern の四機能説(1942-3)、R. Jakobson の六機能説(1960)、D. Hymesの七機能説(1968)、M. Halliday の独特な三機軸(3 axes of lang. function)論(1973)などが、それである。Sternは、Bühler の三機能を1.Symbolic F., 2.Expressive F., 3.Effective F., に変称し、4.Communicative F. を追加した。Jakobson は、1.Referential F., 2.Emotive F., 3.Conative F. に変名し、4.Phatic F. (社会的接触をはたす交話的機能) 5.Metalingual/Glossing F. (言語自身について語りうる注釈的機能), 6.Poetic F. (詩的・芸術的機能)を補足した。Hymes は、因縁の深いJakobson をほぼ踏襲して1.Ref. F., 2.Expressive F., 3.Directive F. (指令的機能), 4.Metaling. F., 5.Poetic F., 6.Contact F. (接触的機能)をあげ、7.Contextual F. (脈絡的機能)を加えた。Halliday は1. Ideational (演述に連なる観念形成的), 2. Intrapersonal (訴えと表出を合体した個人間的)と、新たに追加の3.Textual (Discoursal と同義の話題・情報提供的)の、三機能軸を提案した。が、Bühler の三機能の設定と名称は、深い理論的根拠にたち、また慎重な反省と改善をへたもので、例えばReferential, Emotive の両用語は、哲学的と心理学的な理由に基づいて、さけられている。つまり、Ref. は射程が狭く、一応語論には有効でも文論には通用せず、Emot.は常識心理学的—主観的・実体概念的で、曖昧である。従ってDerstellung, Ausdruck を、Richards の初期の用語—Referential F. Emotive F. に戻し、またAppell もConative F.に変更することは、理論的逆行で改悪でしかなかろう。(現にRichards 自身、Ref. とEmot. を巡る W. Urban(1939)やM. Black(1949)との激論の結果、Speculative Instruments, 1955 では、Ref., Emot. を全面的に改変し、また全体系を大巾に改訂している。) Sternの陳腐で常識的なCommunicative F. の追加は、なおさらである。Phatic/Contact F. は、人間が鳥とも共有する低次元の機能であり(—長話しを引きのばすのも、Phat. communion であり、), 反対にMetalingual / Glossing F. と Poetic F. は、高次元の機能であり、中核的な三機能とは、それぞれ別途に取り扱うべきであろう。また Hymes の社会言語学的なContextual F. も、言語の場の明細化(一場の上・下両層、上層の場のふくむ談話の脈絡など)によって、全て捕捉でき、またより適切に処理できるはずである。(Nidaba, No. 3, 1974, 拙稿参看。)(佐久間博士に遡るDarstellung=「演(出叙)述」は、単純な「提示」や平板な「叙述」よりも、Bühler の考想を前進的に把え、またR. Longacre (1965)やDi Pietro (1971, Ch. 4, p.58)が(叙述)文を演劇にたとえた着想をも先取し、J. Ross(1968/70)の実

演分析 performative analysis の主旨(次節(b)参看)も既に予定していたかのような巧妙な趣向を、備えているといえよう。)

それでは、上記4,5,6の高・低両次元の機能は一応別として、BühlerのCL原論の第一の基軸をなす中核的な三機能には、厳密にいつて何が補充され、またどのように明細化されるべきなのか。これらの問題は、(不透明な主観論や観念論的な空転を排除するためにも必須な)言語を究極的に支えている基盤——つまり筆者のいうSprachfeldの知見なくしては、透徹した解決は不可能であろう。(私案は(c)参看。)

(b) そこで、BühlerのCL原論の第二の主要テーマ(公理(D))の場の論旨に移る。(公理(D)では、象徴の場体系S-F-Systemが主眼なのであるが、ここでは、言語の場全体を広く取り上げる。)Bühlerは、かれが説く場の概念は、もともと心理学の所産であるという(Der Feldbegriff...ist ein Erzeugnis der modernen Psychologie. —P. IV)が、心理学の説く場が、物理学の場と深い因縁をもつことは、いうまでもなからう。Bühlerは、さらに言語の場を、指示の場Zeigfeldと象徴の場Symbolfeldに分ける。(ひろん象徴は、ここでRichards以降の新しい意味に用いられ、文学的象徴を意味しない。因みに、言語の記号Zeichenは、上記の三機能に応じて、象徴Symbol、徴候Symptom、合図Signalとよばれる。)そして著者は、言語に一つの場だけでなく、二つの場を認めることは、新学説であり、本書に展開されている言語理論の真髄をなす、Dass es nicht nur ein Feld, sondern zwei Felder in der Sprache gibt, ist eine neue Lehre. ...Das ist die Quintessenz der hier entwickelten Sprachtheorie. (—P. V.)という。事実、二場説Zweifelderlehreは、全巻を貫く基調をなし、序言ならびに第一章の公理論の中で力説され、第二・第三の両章は、文字通り、指示の場と指示語Das Zeigfeld der Sprache und die Zeigwörter、象徴の場と命名語Das Symbolfeld der Sprache und die Nennwörterの各表題のもとに、その詳論に捧げられている。最終の第四章「人間の談話の構成」論も、「指示の場をもたない文」Der Satz ohne Zeigfeldの節(PP. 366—385)に自明なごとく、二場説に裏づけられている。指示の場と象徴の場は、われわれが現(前の)場または下層の場と、上層の場とよんだものに該当する。Bühlerは、しばしば指示の場を直観的と規定し、象徴の場を概念的と性格づけている。が実は、それらの用語がはらむ功罪と冗長さをさけるために、筆者は、neutralかつ簡潔に、上・下両層の場とよぶことを提唱してきた。また、上・下両層の場といえ、象徴と指示の二場が、究極的に前者が後者に支えられる関連にあること(—P. V その他参看)を、自動的に示唆しえよう。そしてその上・下の場の支持関連性は、上層の場で機能する演述(を体現した)文Prices slumped / skyrocketed. &c. の背後に、J. Ross (1968/70)が設定した最深構造 I say to you (prices slumped / skyrocketed)の成立を、極めて容易に理解させるばかりか、(話者と聴者がinterlocutorsとして相対峙し緊張体系をなす下層の場の事理に鑑み)当然かつ自明の理とするはずである。元来、「演(出叙)述文」では、聴者(一観客)はもちろん、話者(一演出家)自らが、話線(一舞台)に登場して実演的発言をする

ことは減多になく、話線の背後に控えているのが普通である。それは、演述が上層の場で働くことを建て前とする機能である以上、当然である。このように言語の場の重層性に即して、演述文の正常な在り方を考察してくるならば、I (hereby) promise you that I won't squeal. / I (hereby) sentence you to two weeks in The Bronx. などのような、元来 implicit なはずのものを話線に登せた、I say to you S に準じた演述文を、J. Austin (1962) が performative sentences として特別扱いした根拠も、またそれらを筆者が実演文と訳した理由も、自ら納得されてこよう。

〔言語で何をなすかの哲学論争がどうであれ(—J. Lyons (1977) 参看), 通常の演述文の背後に、上記の最深構造 I say to you が想定可能なこと自体に、変わりはない。そのことは、承前の再帰代名詞をふくむ Physicists like myself were never too happy with the parity principle.; ※Physicists like himself were a godsend. —Ross (1968/70), その他一連の演述文の可否にも明らかではある。〕演述文とは対照的に、命令文は、常に下層の場—現(前の)場で機能し、話者が(実演文の時のようにわざわざ舞台上に登る必要もなく、つまり主語として話線に現われる必要もなく)聴者にじかに働きかける訴えの機能を体现している。従って、そうした命令文—Buck up!; Hear me out!; &c. に、過去時制はありえず、その意味内容に真偽の基準が適用しないことも、場の事理から、(実演文の場合より)一層自明な事として領会されよう。〔以上から、命令文は、話線への話者と聴者の出没をめぐって、実演文とも同一のレベルと経緯にあるのではないことが分かる。Austin や Ross が指摘し主張した命令文の「演述型構文へ付会的な深層解釈」は、言語の二場説と(少くとも)三つの本質的機能論という根底的な見地から、克服されなければならない。それにつれて、illocutionary force 論も(Lyons (1977) 参照), 当然、同じ見地からの再考が必要となる。〕

言語の場の理論は、CLの基盤としてのみならず(その具体論は後述), このように言語研究一般の新局面の理解と、その推進・改善に役立つはずである。その際、留意すべきことは、「現象の条件・発生的基盤である場」による言語現象の深い(本質的)次元からの把握と処理は、「現象の多寡に左右される浅い(現象なみの)次元の類概念」に則る言語データの把握と処理の仕方とは、大きく異なる、ということである。基本的な一例をあげてみよう。言語現象の conditional — genetic basis である言語の場に立脚するとき、われわれは、Bühler の説いたごとく、話者、聴者、対象と事態の三つの不可欠な factors に対応して、少くとも三つの本質的機能—演述、表出、訴えを識別し設定することができる。これとは対照的に、例えば Saussure は、「ギ音語(文)や感嘆・間投詞(文)の類は、音義の恣意的な関係という第一原則に照らして破格的であり、言語体系の有機的な部分に属さず、その数も思ったより少く *leur nombre est bien moins grand qu'on ne le croit*, 結局、例外的ケースとして言語 *langue* の体系から疎外してよいものである」という。(Cours., 1931, pp. 101—2.) 現代の(G)T G も、同様な見解にたつ。これでは、高々「演述」の機能面が取り上げられるに止まり、感嘆・間投詞(文)を深く支配する「表出」の機能とその諸相—Oh!; Wow!; Goodness (gracious)!; How rambunctious!; (※How mandatory it isn't!;) &c. も、同じく「訴え」の

機能とその諸相—Hi !; Hey, bud !; Brute !; Buck up !; ※ Do be slim now !; Do/※ Did be more other-directed !; &c. も、あるものは全く無視され、他のものは「演述」の機能面に付会・解釈され、歪曲され、演述文の場合とは異なった非文、つまり星印文の成否など、全く問題にならなかったり、或はその根拠が解明不可能となる。けい眼 Saussure も、伝統文法、史的・比較文法、構造文法が等しく共有してきた類概念的な思考様式の典型的な虜となっていた。言語現象から irrelevant なものを捨象することは、研究上当然としても、訴えや表出の機能軸が、言語現象に irrelevant であるはずがない。それらが談話に不可欠で本質的なことは、言語の条件・発生的な場の事理に徴すれば、明哲・判明である。paralanguage の CS もある今日、これらの機能面にそった CS が見落されてはならない。わけでも、敬語を介しての命令文の CS は、好テーマとなる。

- (c) 抽出主義に基づく類概念的思考様式については、これまでも様々に論じられてきた。今それを要約すれば、次のごとくならう。類概念的思考様式は、第一に、現象の共通・一般的局面に一辺倒する結果、言語をその relevant な全体において把え、その全契機を明細化することができない。それは、より多数の事例からの抽出によって、類概念のもつ共通性・一般性をひろげ、その効力を高めようとする結果、多数を尊重し、少数を軽んじ、多数に本質を求め、少数を非本質視する。従って少数事例は、容赦なく切り捨てられるか、多数事例を支配するルールに付会的に処理される。第二に類概念的思考様式は、破格の、稀少な、非共通的なものに背を向けて一般者を抽出するため、その一般者は、高々「概して、平均的にいって」という程度の射程と効力しかもちえない致命的欠陥をはらむ。この致命点は、たとえその一般性が、能うかぎりの多数事例から抽出される一般性にまで拡大されたとしても、原理的には何ら改善されたことにならない。ただ、程度の差が生じたにすぎない。従って類概念的思考様式は、究極において、人間の言語や人間界の複雑さは、ipso facto に全体的で完全な科学的解明の可能性を拒否するものである、というテーゼに到達せざるをえない。が、それでは、世界における複雑・混沌・未知なるものを解明しようとする科学自身の使命と願望を、みずから原理的に断念・放棄する、という自己矛盾に陥るほかはない。(M. Black : Language & Philosophy, Studies in Method, 1949/70 に、帰納法の弁護論 (ch.Ⅲ) がある。が、演繹と帰納の相互補完性という platitude に終わって、類概念的思考様式論がないのは、残念である。P. Geach, K. Lewin などの方が、よい参考となる。)

われわれが、言語を深く支える条件・発生的基盤としての場の理論を説いてきた大きな理由は、こうした類概念的な思考様式の自己矛盾を救い匡正することにある。(G)TG 論者たちの説論にも、こうした経緯の認識不足と、言語の場への着目の欠如が目立つ。taxonomy から generation へ、さらに Di Pietro などに見られる両者の安易な妥協と吻合へ、という動向は、そうした認識の不徹底さを、何よりも象徴的に示している。さらにいえば、(G)TG 自体も、既に指摘してきたように、様々な改変にもかかわらず、そのルールの体系では、文のすべての varieties を生成できず、その深層構造は、所詮、浅層構造にすぎないといわれても仕方がなかろう。文の論議は、言語の本質機能である演述、

表出、訴えの、それぞれの純粹(な)型〔一理想(的)な型は誤解をまねき易いので不採用〕と、それらの機能が互に優先的または副次的要素となって織り出す結合型との、段階的・系列的な定位から始めるべきである。それらの明細化は、CL, CSの(そしてまた言語研究一般の)理論的基盤として、その必須な基底部をなす。なぜなら各言語は、上記の「純粹(な)型」と「結合型」の段階・系列をめぐって、様々な基本的対照を示すはずだからである。

例えば、演述の機能にそって、それが働く上層の場合は、課題の場と話題の場に分かれ、課題の場における演述の機能の純粹(な典)型としては、*Man is a thinking reed. / L'homme est un roseau pensant.*; *April is the cruellest month* などがあり、話題の場におけるそれとしては、(1)日本は、山が多い。/ 関東は、風がよく吹く。/ 今夜は、バカに犬が吠える。(2)象は、目が小さい。/ あの人、頭がよく回転する。/ 学長は、教養がズバ抜けている。 などがある。そして、話題の場の文から課題の場の文へと、段階的に、構文は compact な緊密体となってゆく。つまり、話題の場の文では、話題は残りの解説・描写部と、さほど緊密な関係にはなく、時には省略されることもありうるけれども、課題の場の文では、課題は、厳密な問題提起部をなし、それに続く部分は、その解決部という緊密な関係にあり、従って課題も解決部も、原則的に省略されることはなく、もし恣意的に省略されるならば、意味をなさなくなる。(単純な主語・述語論との相違に注目されたい。)また、同じ話題の場の文の中にあっても、(1)の例「日本は、山が多い。」などは、「日本には、山が多い。/ 関東では、風がよく吹く。」という特説(の「は」を伴う)構文に連なり、反対に(2)の例「象は、目が小さい。」と一見同じの「雪は、色が白い。」は、実は課題の場の文に連なる。なぜなら、それは、「色が」を省略しても意味内容に殆ど変わりがなく、その場合は、課題の場の文となりうるからである。(が、「象は、目が小さい。」の「目が」は省略できない。)つまり、「雪は、色が白い。」は、形式的には話題の場の文であるが、内容的には課題の場の文という、中間に位する事例なのである。(1)の「今夜は、バカに犬が吠える。」などでは、話題の部分と解説・描写部が、かなり oblique な関係にあるけれども、(2)では、「象の目」、「あの人頭」という意味関連が感得でき、oblique な巾が小さくなり、課題の場の文では、課題部と解決部が、真向から straight に対決する。このように、単純に S P とか NP VP とされてきた構文には、実は様々な variety があり、それらが、段階的・系列的に continuum-like に連なっている。中間的ケースも、こうして適切に定位され、処理される。そして CL, CG の観点から刮目すべきことは、以上の課題の場の文と話題の場の文の例示から推測されるように、英語などでは、話題の場の文は極めて少なく、反対に日本語には、豊富に見られることである。朝鮮語、ペルシャ語などにも、それぞれの特徴と共に観察されるが、インドネシア語では、二重、三重もの話題が、かなり普通といわれる。(崎山理「南島語研究の諸問題」S 4 9、拙稿「Sprachfeldの理論的・実践的効用」S 3 1、英文学研究 3 3 巻 1 号、「いわゆる主語・述語と日・英語」S 4 5、外国文学研究 1 6 巻を参看。)

また、以上の場の明細化と共に、それと関数的関係にある機能についていえば、Bühler 理論の改

善と拡充の中で、第一に問題となるのは、場の見地からの、ギ音・ギ態を支配する音声描写 Lautmalerei / Phonetic Depiction の処遇改訂であり、第二は、同じく場との関連における指示語 Zeigwörter の再吟味と再定位である。第一点については、近くは紀要「外国文学研究」15巻1968, その他の中で、「音声描写」を、「演述、表出、訴え」とは異なる機能軸とする筆者の見解を述べてきた。（「言語機能に関するワダ・サクマ理論」参照。佐久間博士「日本的表現の言語科学」1967参看。）音声描写を通してみた日・英語の対照は、こう要約できよう。まず、日本語は英語以上に音声描写に富んでいるが、特に音響以外の、運動・変化、状態・性状、心理的な動きと状態に関するものが、英語に比べて秀でて豊富である。つまり、日本語の音声描写の語・文は、英語のそれより、発達論的にいって、より高度な段階の描写を展開している。次に、英語に比べて形容詞の少ない日本語では、音声描写の語詞が、少い形容詞による修飾の独特な埋合わせとして役だっている。（例——ビッシリ詰まる、ポッカー開く、ピンとくる。）さらに、「音声による相貌的・未分析的な事象描写」は、演述の場合の間接的・分析的な事象描写を支え育てる理論的温床をなし、その点をめぐって日・英語は、前者が、その豊かな音声描写を足場として、事象描写に適した話題の場の構文を定着させてきたのに対し、後者は、その音声描写の不十分な展開の当然の帰結として、明確な話題の場の構文を殆んどもってない。（第二点の指示語論については、与えられた紙数を考慮して、次の拙稿を記すにとどめたい。

「代名詞の基礎づけ——Sequence Signals 論を含む」835, 英語英文学研究7巻1号イエスペルセン生誕百年記念号, 「日・英語の構文の一般言語学的考察」外国文学研究15巻1968.）

以上、Bühler の枠組を改善・拡充しつつ、言語の究極的に支える場と関数的関連にたつ本質的機能の、構文的体現としての純粋型を軸に、独自の typology と、諸構文の位相論的な解明へと進み、同時に前編からの懸案の解決と、CLの基本的な実践例を示した。それは長年にわたり展開してきた筆者の持論で、その中では、最近問題となった位相論的研究も、S26年（の「受身の領域——Topological Study」英語青年7）以来、またTopic, Deixis 論も、S31年（の英文学研究33, 1の拙稿）以来、L & CL的に実践され、1978年Language, 54, 3の条件節＝話題論も、夙い前に（「～ば、～は」を通して）日本論で定位置みである。

文献は、紙数節約のため、Pietroの著書、Lyons の Semantics I & II, 1977の文献参看。その何れにもないものは、本文中に書名を記しておいた。なお次を追加しておく。Stern (1942-3) = in Studia Neophilologica, Vol. XV, Nos. 1-2, Uppsala; Jakobson (1960) = "Linguistics & Poetics"; Hymes (1968) = in Fishman: Readings in the Sociology of Language; Urban (1939) = Language & Reality (also 1951); Itkonen: Grammatical Theory & Metascience, 1978.